

学部横断の課題解決型プログラムで学際的な視点を持つ人材を育成する

社会が複雑化して、一つの学問領域では社会問題にアプローチしにくくなっている。そこで中央大は縦割りの学部教育を見直し、学部横断型の教育プログラム「FLP (Faculty-Linkage Program)」を導入した。各学部の学生が協同して課題解決型学習に取り組み、学際的な視点を育てる独自性の強いプログラムだ。

取り組みの背景と歴史

複雑化した社会に対応できる人材を養成

中央大の教育改革の核となっているのが、総合大学の強みを生かした学部横断型の教育プログラム「FLP (ファカルティリンケージ・プログラム、Faculty-Linkage Program)」だ。その名の通り、法・経済・商・理工・文・総合政策の全6学部の教育資源をリンクさせる試みである。「**「実地應用ノ素ヲ養フ**」という建学の精神と、「**学識を広げ、問題を発見して解決する力を磨く**」という教育目標を、時代に合わせて実現することを目指し、2003年度にスタートした。背景には、社会のめまぐるしい変化に即して変わらねばならないという危機感があった、と学事部教務総合事務室事務長の橘由紀夫氏は語る。

「環境問題に見られるように社会問題は複雑化し、学際的なアプローチが必要とされています。従来の縦割



学事部教務総合事務室
事務長

橘 由紀夫
Tachibana Yukio



学事部教務総合事務室
武地 紫
Takechi Yukari

りの学部教育という発想から抜け出し、各学部が協力することでより柔軟な教育プログラムを生み出そうと考えました。18歳人口の減少が進むなか、魅力的な教育プログラムの創造により、学びへのモチベーションが高い学生を確保したいという思いもあります」

改革を進めるに当たり、当初は新学部の設置も検討した。しかし、教授会などで議論を重ねるなかで、教育内容をアレンジしやすい学部横断型の組織のほうが、更なる社会構造の変化に対応しやすいと判断した。

「FLP」とは

課題解決型学習を通して社会人としての基礎力を育成

FLPでは、現代の社会的ニーズを踏まえ、「環境」「ジャーナリズム」「国際協力」「スポーツ・健康科学」「地域・公共マネジメント」の5プログラムを開設(図1)。学内選抜を通った各学部の学生が3年間にわたり、協同して一つのテーマに取り組む。2011年度は、2～4年次の計約640人の学生が履修。延べ58人の教員が指導する。教務総合事務室の職員が活動支援を行い、履修生専用のミーティングルームも設置している。

学生は通常の学部教育のほか、各プログラムで指定された20単位の講義科目と12単位の演習科目を履修。

総合政策学部教授

松野良一

Matsuno Ryoichi

朝日新聞社、TBS東京放送を経て2005年より現職。専門は、メディア論、ジャーナリズム論、メディア表現教育。



卒業に必要な単位数は一般の学生と変わらないため、所属学部の学びと両立しやすくなっている。各プログラムでは、少人数のゼミ形式での課題解決型学習と充実したフィールドワークが展開される(P.20図2)。

「単に社会で役立つ知識を備えるだけではなく、社会の課題に実際に向き合い、新たな価値を生み出せる人材が求められています。そうした力を育てるには、積極的に大学の外に出て、現実の社会を見て、主体的に課題を解決する体験を積むことが不可欠と考えています」(橘氏)

異なる学部の学生と協同し、多様な視点から課題に取り組むのも特徴だ。学生は将来、さまざまなバックグラウンドを持つ人とともに仕事を進めることになるが、そうした協同作業を大学時代に体験できるわけだ。

「自分とは異なる関心や考えを持つ学生と学び合うことで視野が広がり、課題解決の質が向上するとともに、協調性や責任感、主体性、統率力、対話・交渉術をはじめとした『社会人基礎力』の養成にもつながると考えています。更には、『自分に足りないもの』を自覚することで、講義

への関心も向上します」(橘氏)

FLPの具体的内容

履修者の半数以上は FLPの存在を知って入学

FLPの具体的な内容を、ジャーナリズムプログラムを例に紹介する。

ジャーナリズムプログラムは、主にマスメディアを志望する学生を対象としており、現場で活用できる専門知識や実践力を身に付けることを目指す。約40人が履修するゼミ「番組制作とノンフィクションの取材・執筆による多様な能力の開発(12年度)」を開講する総合政策学部の松野良一教授はこのように説明する。

「学生はケーブルテレビ用の番組制作を中心に複数のプロジェクトに携わります。理論と実践は、半々のイメージです。大切にしているのは現場を訪れて当事者(取材対象)に会って話をすることです。企画→撮影→編集→アウトプットのサイクルの繰り返しにより、コミュニケーション能力、表現力、リーダーシップ、マネジメント能力など、社会人として、そしてジャーナリストとして活躍するために必要な基礎力を育てます」

法学部政治学科3年の村松拓さんは、高校時代、将来的にテレビ関係

図1 FLPの5プログラム

環境プログラム	環境問題を複数の視点から学び、必要な取り組みを立案できる人材を育てる
ジャーナリズムプログラム	ジャーナリストとして活躍するための専門知識と広い知識を身に付ける
国際協力プログラム	途上国の諸問題を多角的・総合的に研究。貧困問題の解決に貢献することを目的とする
スポーツ・健康科学プログラム	医療や文化、ビジネスなど、幅広い領域でスポーツの発展に寄与できる能力を養う
地域・公共マネジメントプログラム	これからの社会の鍵を握る「地域社会」で、将来、政策形成を担える人材を養成する

*同大学の資料をもとに編集部で作成

の仕事に就きたいと考え、関連する内容を学べる大学を探した。そして同大の大学案内で松野教授のゼミの紹介を見つけたという。

「本物のテレビ番組を制作できるなど実践的な学びに引かれました。映像制作に特化した大学なども調べましたが、中央大のFLPはジャーナリズムについても深く学べることを知り、より幅広い観点から学習できると思って入学しました」

FLP履修生対象のアンケート調査などから、入学前にFLPの存在を知っていた学生は半数以上と推測されている。このことから、FLPは受験生に向けても中央大をアピールする大きな役割を果たしていると考えられる。

プロジェクトの経験を通して 学部教育の意味を実感

松野ゼミでは、すべての学生が全国8局ネットで放送されるケーブルテレビ用の10分番組「多摩探検隊」を制作する。ディレクターやカメラマン、キャスターなど役割分担をして進めるが、番組制作の流れを習得するため、どの学生も最低1回はディレクターを体験。そのほか、同じくケーブルテレビ用の30分番組や出版用のノンフィクション作品の制作など、学生自ら希望の進路に応じてプ

ロジェクトを企画し進行させる。

繰り返し述べているように、学びのポイントの一つが各学部の学生が協同することだ。例えば、法学部の学生が著作権や肖像権など権利関係について意見したり、文学部の学生が外国語の翻訳をしたり、経済学部の学生が農業経済学の観点から多摩地域の農業を調べたり、それぞれが専攻分野を生かしてプロジェクトに貢献している。また全員でゼミ改革に取り組んだ際には、商学部の学生がマーケティングの手法を活用して有意義な提案をしたこともあった。

「学部の中だけで学んでいると、どうしても視野が狭まってしまう傾向があります。他学部の学生も集まったプロジェクトで自分の知識が役立つ経験をして初めて、学部で学んでいることの意味を実感できることも多いようです。この経験は、『大学での学びは社会でも役に立つ』という考えにつながります」(松野教授)

教授の方針によっても異なるが、学部と同様に学年も混成でプロジェクトを組むゼミが多い。学事部教務総合事務室の武地紫氏が言う。

「そのようなゼミでは、先輩が後輩を教える姿が日常的に見られます。学生にアンケートを取ると、『先輩から教わったことが大きかった』という声はととても多いです」



経済学部
経済情報システム学科4年
Yamashita Kaori 山下 香



総合政策学部
国際政策文化学科3年
Ominato Risa 大湊理沙



法学部政治学科3年
Muramatsu Taku 村松 拓

松野ゼミも学年間の協同作業を重視しており、プロジェクトにはティーチングアシスタントとして、指導が出来るだけの経験を積んだ学生が必ず入る。リーダーシップや協調性の育成に加え、課題解決型学習をより効果的に進めるのも狙いだ。

「教師がどこまで教えるか」は課題解決型学習の難しさの一つだ。教え過ぎると自ら解決したことにならないし、学生に任せ過ぎると解決の糸口が見いだせず、学習が停滞してしまう。その点、先輩が後輩に教える形態を取り入れると、学生は「自分たちで解決した実感」を持ちやすい。松野ゼミでも開設当初は基礎講座を設定するなどしていたが、現在では学生間での学び合いを重視する。

「私はなるべく最終チェック時しか口を出さないようにしており、先輩から後輩に知識やスキルを伝えることが定着しています。同じ学生からの指導は心に響くようで、ダメ出しされた後輩が落ち込む場面もあります。しかし、その後に先輩が後輩をちゃんと丁寧にフォローする姿が見られるなど、そういう経験も双方にとって良い学びとなっています」(松野教授)

感動とともにもたらされる学生の成長

こうした学びを通じて、学生はどのような成長を実感しているのか。

経済学部経済情報システム学科4年の山下香さんは、テレビ局に入社したいという希望をもって松野ゼミに入り、あるテレビ局からディレクターとしての内定を獲得した。

「興味を抱いたことをどのように調べれば核心に迫れるかが具体的に分かりました。また現場を訪れることの大切さも知り、ゼミの活動以外にも個人的に知りたいことを調べに行

図2 各プログラムで実施されたフィールドワークの例 (2010年度実績より)

環境プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・福島県只見町において環境保全・創造活動についての視察 ・神奈川県三浦市での臨海実習 ・八王子市において農業振興についてのヒアリング
ジャーナリズムプログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・長野県において明治初期の地方情報メディアの成立を調査 ・福島県において企業の危機管理と報道のあり方を調査 ・高尾山において「天狗伝説」にまつわるテレビ番組制作
国際協力プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・ベトナムにおいて現地住民に対する社会調査 ・ドバイにおいて現地日系企業へのインタビュー ・ラオスにおいてJICA事務所でのインタビューや活動視察
スポーツ・健康科学プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・長野県においてノルディックウォーキングについての調査 ・北海道においてのプロスポーツチーム視察 ・新潟県においてスキー場での調査
地域・公共マネジメントプログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・富山市の行政機関等へのヒアリングおよび政策提言 ・京都市においての自治体やNPOへのヒアリング ・多摩市での水上ステージ企画、運営に参加

*同大学の資料をもとに編集部で作成

くようになるなど、とても行動的になりました。例えば、東日本大震災前から原発問題に興味を持っており、個人的にチェルノブイリを訪れたり、実家のある山口県の祝島で原発反対運動が続いているので、関係者に話を聞きに行ったりします」(山下さん)

山下さんがディレクターを務めたドキュメンタリー「硫黄島から戻ったイチョウ」は、「ヒューマンドキュメンタリーコンテスト2011」や『『地方の時代』映像祭2011』などの映画祭で入賞した(図3)。こうした経験が就職活動でも自信になったという。

「夜通しの編集作業などはつらかったですが、『ここまでやれた』という思いは就職活動の心の支えになりました。知識やスキルも身に付きましたが、FLPで得た最大のもの『精神力』だと思います。また実際にアウトプットした作品を提示することで具体的なアピールができましたし、大学での学習内容に興味を持ってくださった企業も多かったです」

総合政策学部国際政策文化学科3年の大湊理沙さんは、コミュニケーション能力の面で自信が付いたと話す。

「初めは知らない人に電話をかける

のも怖い状態でしたが、初対面の人とのコミュニケーションや目上の方への接し方などはずいぶん上達したと思います。自分がきちんと礼儀やマナーをわかまえば、相手も快く接してくださることを体験的に理解して自信が付きました」

特に成長のきっかけとなった経験が、大韓航空機007便墜落事件に関するノンフィクション作品の取材・執筆だったという。大湊さんたちは1983年に起きたこの事件の日本人被害者の遺族10人を訪ね、インタビューして記事を書いた。

「今も精神的なダメージを抱える遺族の方が多く、厳しい言葉とともに断られる経験もしました。一方で、『事件を風化させたくない』『今の大学生が興味を持ってくれるのがうれしい』と依頼に応じてくださった方もいました。プロジェクトを通してジャーナリズムについて深く学び、自分自身、一生懸命に生きなくてはという思いが強まり人生観も変わりました」

締め切り前はFLPが生活の中心になり、遊びを優先する友人がうらやましく思えたこともあったという。

「そんなときに励みになったのが、

松野先生の『快樂より感動を』という言葉。作品を完成させたとき、この言葉の意味がよくわかりました」

FLPが忙しい時期もバランスよく計画を立て、学部の学習との両立を心掛けているという大湊さんは、早期卒業制度を活用し3年間での卒業、大学院進学を目指している。

アウトプットすることで 揺るぎない自信が生まれる

村松さんは、ゼミ長という立場を経験して自身の成長を実感している。

「同時進行するプロジェクトを全て把握し、それぞれのスケジュールをチェックしたり、トラブルに対応したり、撮影のために大学の施設を確保したり。とにかく忙しくて辞めたくなることも多々ありましたが、その半面、終わってみると、全体を把握してマネジメントをする力がかなり付いたと感じています」

どの学生にも共通するのは、ひと筋縄ではいかないプロジェクトを完結させたことからくる自分への自信だ。松野教授はこう強調する。

「実際にアウトプットすることは、自分への揺るぎない自信をもたらします。だから、就職活動がなかなかうまくいかなくても決してへこたれない。就職後につらいことがあっても、『大学時代にあれだけ学んだのだから』と思い出し、改めて頑張ろうという気持ちになれるのです」

これからのFLP

量的・質的な充実により FLPの価値をより高める

FLPの今後の課題の一つは、理工学部の履修者が少ないことだ。文系学部は多摩キャンパス、理工学部は後楽園キャンパスと地理的に隔たりがあることに加え、理工学部は文

系学部の学生に比べて履修内容がハードなためだ。理工学部の学生へのフォローを充実させて履修者を増やすことは、学びの視点の広がりをもたらすなどメリットが大きい。

FLPの履修者と未履修者との間に、学びへのモチベーションの差が見られるのも課題だという。現在は、FLPを履修する学生に対し、学部の授業のなかでディスカッションをリードする役割などを期待しているが、影響はまだ限定的だ。

「現在は1年次に履修者を決めています。2年次以降にFLPを知り、学習へのやる気が芽生える学生もいます。また11年度は志願者451人に対して合格者は282人であり、希望者全員が履修できるわけではありません。FLPの選考から漏れた学生をいかに拾い上げていくかを検討する必要性を感じています」(武地氏)

そうした課題はあるものの、学生の満足度が高いことや良好な就職実績などから、現在の取り組みを維持・拡大するのが基本的な方針だ。ただし、学部とは別にFLPのゼミを担当できる教員には限りがあり、また

各プログラムの定員を際限なく増やせば少人数教育の機会が失われるため、急拡大は難しい。徐々に履修者を増やす体制を整えていく考えだ。

量的な拡大とともに、質的な充実も常に視野に入れている。

「FLP修了証の価値をますます高めるために、現在の5プログラムの内容を常に精査するとともに時代の要請を敏感に察知し、必要に応じて改編していく考えです」(武地氏)

FLPの充実を検討する際、根本的な課題として浮き上がるのが現在の6学部体制だ。

同大で最も新しく設置された学部は、1993年に開設された総合政策学部であり、新学部の設立を要望する声も少しずつ学内で聞こえ始めている。新学部が設置されれば、教員数が増えてFLPに携われる教員も増加するほか、新たな学問的なアプローチが加わるというプラス面がある。

今後も社会の動きを見据え、大学全体で教育改革を推し進めていく考えだ。そのうえでFLPは、既存学部にはない革新的な教育を開発する実験場の役割も担っている。

図3 松野ゼミの活動例

2つの映画祭で入賞「硫黄島から戻ったイチョウ」

◎経済学部経済情報システム学科4年の山下香さんがディレクターを担当した10分間のドキュメンタリー番組「硫黄島から戻ったイチョウ」が、「ヒューマンドキュメンタリーコンテスト2011」「『地方の時代』映像祭2011」で入賞。

〈あらすじ〉日本兵2万人以上が戦死した激戦地・硫黄島。戦後、遺骨収集団が地下壕で掘り出したある兵士の遺品の中から、血染めのノートに挟まれた1枚のイチョウの葉が見つかった。このイチョウの葉は、3歳の息子が自宅で拾い、母親が軍事郵便に同封したものだ。父親は死の直前まで、そのイチョウの葉を大事に持っていたのだ。検閲の厳しい時代に家族の思いを伝えたこのイチョウの葉が35年ぶりに祖国に戻り、兵士の息子のもとに戻った。

「遺品の中からイチョウの葉の物語を見つけ出したのは山下なんです。われわれは『情報』を撮りにいくのではなく、『物語』を撮りにいくのです」(松野教授)

動画がこちらからご覧になれます

多摩探検隊「番組アーカイブ」

<http://tamatan2.exblog.jp/13176110/>

